支部だより No.154

日本山岳会京都・滋賀支部　2024年3月15日

巻頭言

春の訪れを前に

支部長　笠谷　茂

2024年、年始早々発災した能登半島地震に被災された皆様にお見舞い申し上げると共に、初動対応を行っていただきました皆様、復興に向け支援活動を実施されている関係各位、ボランティアの皆様に感謝申し上げます。

冬枯れとなっていた近郊の山々においては新緑の季節はもうすぐです。日に日に昼間の時間が長くなり気持ちも高揚します。一足先に開花するタムシバも楽しみです。雪に覆われた山は春山、そして残雪期へ。残雪期が登山適期となる山へも出かけてみたくなります。雪が残る山々の眺望も素敵です。魅力がいっぱいの季節ですが、強まる日差し、一方で気温低下、冬に逆戻りすることもあります。融雪期の春の山では、落石、浮石にも注意が必要です。そして花粉症への備えも。リスクに目を向け事故のないように楽しみましょう。

日本山岳会創立120周年記念事業として「全国山岳古道調査」において、当支部が担当している9古道の調査、報告書の提出は村上委員、岡田会員のご尽力により完了しました。関係者のご尽力に感謝申し上げます。私も何度か調査に参加しましたが、興味を持って地図や歴史をひもとき古の人々や時代に思いを馳せると景色の見え方が変わります。京都、滋賀は古道の宝庫です。新しい楽しみ方が共有され、歩く機会が増えることを期待しています。

12月2日に開催された日本山岳会年次晩餐会での橋本会長のあいさつが『山』943号に紹介されています。その中で、2025年に120周年を迎える日本山岳会の課題と今後の発展に向けての「みんなの日本山岳会」というキーワードと4つの目標が述べられています。また、財務状況の悪化に伴う改革も避けては通れない喫緊の課題となっています。日本山岳会全体も大きな変換点に来ている中、支部でも変化への対応が必要となります。実働人員が減少している私たちの支部においては、「今の身の丈（実力）に応じた活動」を行っていくことが必要です。クラブライフを楽しむことを原点とし、魅力ある活動を行い、参加している人が楽しいと感じ、そのことを共有すること、発信することが好循環を生むことにつながると考えています。次年度に向け、私たちが楽しいと思う、身の丈に応じた活動を計画していきたいと思います。引き続き会員の皆様の会務へのご支援、ご理解、ご協力を宜しくお願い致します。

前号で触れた友の会制度の集約については、その時期を2024年度末（2025年3月）とします。友の会会員の皆様には日本山岳会の準会員または正会員へ移行いただくことを是非ご検討ください。支部会員として一緒にクラブライフを楽しみましょう。

活動報告

北山探訪

三等三角点向山△695.5m サプライズもあった

田中昌二郎

馴染みの長老山塊を由良川左岸の山から眺めてみようと、このマイナーな山を選んだ。地形図によれば、向山の頂上から東へ、そして北東へ由良川に向かって長い尾根が伸びている。その末端近くから登り出し、山頂から北へ向山集落目指して下る周回コースを計画した。少し藪漕ぎが楽しめるかも知れない。

美山町安掛に午前8時30分集合し、九鬼坂を越えて静原から由良川沿い西へ。H型の高い鉄塔から斜めに鋼綱を張り渡した向山橋を渡って、由良川左岸の向山集落に入り、「ゆず園」の前に駐車した。雨が残るかと心配したが大丈夫、晴れ。

林道宮ノ谷線を進む。周りは厳重に獣害除け、不法投棄防止の金網が張り巡らされているが、前もって区長さんから教えてもらっていた鍵番号を廻してゲートを難なく通り、由良川と肘谷との合流点まで伸びる尾根の標高約300m地点に乗る（10:30）。辺りは予想以上に明るい広葉樹の林で、コシアブラの幼木が目立つ。

樹間も広く下生えの藪も薄いのでスイスイと進み、標高点426も難なく通過し、更に標高差約200mを登って標高点578との分岐点ピークに着く。相変わらずコシアブラとコルクの木が多い。ここも藪は薄く、一見下生えを掃除したようにも見えるほどに美しい。小さなアップダウンを繰り返して標高点609を通過し、頂上を望むコルに着く。

2.5万図を見ると、今までなだらかだった尾根が頂上ピークの直下で高度差約50mの壁にぶつかっている。この地形が不思議で、ルートをどうとったものか心配していた。しかし登り出すとサプライズが待っていた。目の前に高さ5m余りの赤褐色の岩壁と大きな洞窟が現れた。一同仰天、驚きの声をあげる。岩室ないし洞窟の広さは6～7畳敷きもあろうか。どうしてこんなところにと疑問を抱きながら正面の岩壁を巻いて頂上を目指し、切り開かれた広い三等三角点ピーク、点名向山に着く（12:30）。高い樹林に遮られて、残念ながら長老山塊を望むことは出来なかった。昼食とする（12:30）。

（下山後、この大きな岩室について向山集落の区長梅津氏に確かめたところ、昔マンガン鉱石を採掘した跡とのことであった。）

記念撮影の後、北へ伸びる尾根を向山集落目指して下山を開始するが、標高点495辺りから様相が変わる。急傾斜の上に藪が深くなり、その上藪の中の足元に小さな穴が次々と現れる。これもマンガン鉱石の採掘時のものだろうか、踏み込まないか不気味であったが、

向山頂上直下の岩室にて

そのうち植林地も見えてきて無事径に出ると、今度は獣害除けの金網ゲートが見えてきた。もし鍵が掛っていたら獣の世界から出られなくなるかもと一瞬心配したが、鍵は掛ってなくて人間の世界に戻ることが出来た。そして集落の中からやっと当初の目的であった長老ヶ岳から和知富士への雄大な山塊を眺めることが出来た（15:10）。

登頂後にと決めていた瀧明神にも参拝。由良川の大野ダム建設でダム湖の湖底に沈む為、この地に遷座されたというが、急傾斜の森に立つ社殿の静かな佇まいと、社殿への石段の前に立つ大欅に風格を感じた。

資料のない尾根を登ってサプライズにも遭遇して、記憶に残る山行になった。

実施日：2023年10月28日（土）
参加者：田中昌二郎（L）、笠谷　茂（SL）、八木　透、
　　上田典子

向山山頂にて

個人山行

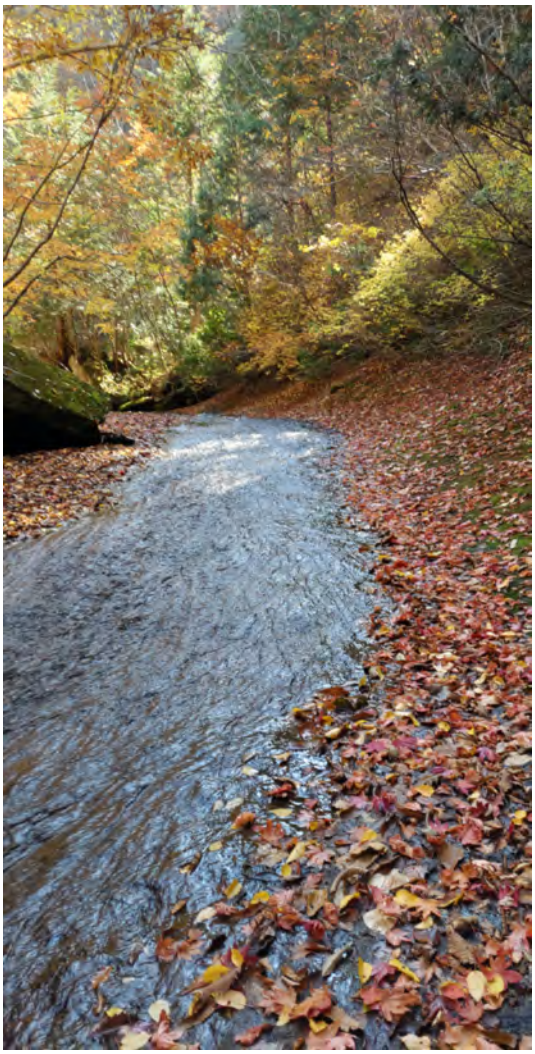
錦繡の沢上谷（そうれ谷）沢歩き

土井文雄

快晴の中、色鮮やかな木々に囲まれた中に大きな滝が眼前に現れるたびに「わーっ！　凄ーい！」と感嘆の歓声が上がる、笑顔溢れる沢歩きになりました。

僕はこの時期の沢上谷が好きで今回で4回目。紅葉の中ナメ沢をヒタヒタと歩くのは独特の雰囲気がある。

本来は8月に健幸登山教室として行く予定だったが、現地の天候が悪く、八池谷に変更になった。その際、「秋の沢上谷綺麗ですよ～」「行ってみたい、けど寒くない？」「ドボンしないように歩けば膝下までしか濡れないですよ」なんてやりとりがあり、全員が参加希望し11月3日に実現となった。



錦繍の沢上谷

前夜近江舞子駅に集合、2台に分乗して高山市へ向かう。深夜に奥飛騨温泉郷上宝道の駅に到着して仮眠。明るくなり起床後それぞれ準備して駐車地に移動。ヘルメット、ハーネス、防寒対策の雨具等を装着して橋のたもとから入渓。

水はもちろん冷たいが一歩も入りたくないというほどでもなく快適。去年の同時期はちょうど寒波到来で寒い思いをしたが今回はネオプレンジャケットを着てるとじんわり汗ばむくらいだ。

枝沢に入り、五郎七滝を目指す。まるでコンクリートのような岩盤の上をサラサラと水深5mmの流れが続く。黄色や赤に染まった落葉が流れを堰き止めていたり流れに負けてゆっくりと落ちて行ったり。一度巻き道を使い、沢筋に戻ると二手に分かれていた沢が合流した五郎七滝が現れる。何度も見ているが毎回不思議な光景にうっとりす　る。視界に入る全ての岩肌が濡れて水が薄く流れている。その周囲は黄色、赤に染まった木々。そしてこの光景を見ているのは我々だけというのも特別な気分にさせてくれる。一段テラスのようになっている場所まで登って記念撮影。

足を滑らせないよう慎重に歩こうと指示をして下る。が、すぐに僕が尻もちをついて苦笑い。他のメンバーは無事に急斜面を降りて本流に戻り次の岩洞滝を目指す。本流を何度か岩伝いに歩き、小滝の横を通過して岩洞滝のある小さな枝沢に入る。程なくすると五郎七滝の枝沢とは大きく雰囲気が変わり、大きな岩が転がっていて手も使いながら登って行く。そして甘い香りが漂う。視線を上げると至るところに桂の大木が並んでいる。本当に大きな桂ばかりで圧倒される。容易に行ける場所なら名所となっても良いくらいだが、この季節に沢登りをする人だけの特権だと皆で笑う。そして突然視界が開け、高さ30mの岩洞滝が眼前に飛び込んでくる。大きな歓声が上がる。下から見上げると青空から直接水が降ってくるような錯覚に陥る。岩洞滝は滝の裏側に入っていける。左岸を慎重に歩き裏に入り簾のような水の向こう側に見える紅葉の山肌を眺める。ここに立つとなぜこの枝沢はナメではなく大岩があるのかがわかる。長い時間をかけて滝が岩盤を浸食して崩落しているのだ。そう考えると裏側に入るのも少し怖い気もする。

再度ナメの続く本流に戻り最後の簑谷大滝を目指す。水音が大きくなり、高さ40mの簑谷大滝が突然姿を現わす。この日一番の歓声が上がり、笑顔で大きな一枚岩をレースのカーテンを纏ったような美しい容姿を眺める。流れる量は少ないので滝壺はなく容易に滝の真下に立つ事が出来る。

ここから滝の落口までは急斜面の高巻き。標高差

五郎七滝

100m を枝や木の根を掴んで登り切ると次は落口まで60m の急下降。フィックスロープがセットされていて一人ずつ慎重に下り無事全員通過。危険箇所はもう無く残すは天国のようなナメがひたすら続く。落ち葉が敷き詰められた歩道のような沢を歩き小さな橋の手前で脱渓。皆楽しかったようで笑顔で昼食しながら談笑。

重たいギアを脱いで林道を駐車地までのんびり紅葉を楽しみながら歩いて行く。

ほぼ予定時間通り下山となり途中で奥飛騨温泉郷の日帰り温泉で冷えた身体を温め帰路に付き終了となった。

今回は気候に恵まれ暖かい日となり快適そのものであった。

実施日：2023 年 11 月 3 日（金）
参加者：土井文雄（CL）、瀬崎暢子、矢野達子、
（準会員）上野陽子、（友の会）米森昌一

例会　第 23 回　五支部合同懇親山行
石動山　史跡・多根道

津田美也子

「能登はやさしや土までも」との言葉が心に残り、満ち足りた気持ちで帰途についた能登の山旅、1 月末の報告締め切りに、取り掛かろうとしていた矢先の元日の大地震、つらく苦しく、書き出すことが出来ないでいた。

能登にご縁のある方も多いであろう。私自身も北陸線が七尾線に分かれる津幡駅から、倶利伽羅、二つ目の石動が鉄道乗車駅での生まれ。学生時代春休みに輪島出身の学友とご実家を訪ね、親戚の輪島塗工房や千枚田、朝市を案内してもらった。そのご長男が金沢から帰省されていて家屋の下敷きで亡くなられたとの悲報に、かける言葉が見当たらない。友人は西宮市、29 年前の 1 月のことを思う。役立つことは何一つできないけど、気を取り直し、能登への思いを込めて、11 月の 2 日間を振り返りたい。

今回の五支部合同懇親山行は石川支部のご担当。無雪期の合同山行には初めての参加。行く先は「石動山」との案内に、一も二もなく参加を申し込む。前述のように、ふるさとの鉄道駅が「石動（いするぎ）」で、気になっていた山だったからである。

いただいた資料によると、令和 2 年、3 年が 20 回、21 回で石川支部ご担当であったがコロナで中止、令和 4 年は岐阜支部の創立 50 周年、猪臥山が 22 回として兼ねて実施され、今回ようやく開催の運びとなった 23 回。中止時の山はカタクリ群生で知られるオンソリ山を予定でおられたが、今回は全国山岳古道 120 選「石動山・多根道」とされたとのことである。

石動山（せきどうさん 564m）は、泰澄大師が開山したとも伝えられ、東北から近畿にかけて拡がった「いするぎ信仰」の拠点であった山。中世には能登観音信仰の中心地でもあった。最盛期には 360 余坊、3000 人の衆徒がいたとも言われ、度重なる戦乱により栄枯盛衰を繰り返し、明治初期の神仏分離令により瓦解。現在は山全体が国指定の史跡となって遺構が残る。講演会は「石動山を愛する会」の櫻井憲弘氏より「能登の霊峰・石動山の歴史」のレクチャー。能登文化発祥の地と言える中能登。七尾市教育委員会で文化財保護や中能登町教育委員会の文化財担当課長などをされてきた櫻井氏は、能登地方で古くから伝わる「能登はやさしや土までも」という言葉は、年配の人ならだれでも知っている心温まる歌である。能登の風土によって培われた能登人の人情とでもいうか、いわば他人への気配り、思いやりの深さをあらわし、今でも私たちの心をとらえると、熱く語られた。

「アルバータ山のピッケルものがたり」の紙芝居は、アルバータ峰初登頂の槙有恒隊長が山頂に残したピッケルのその後のお話。芳賀淳子会員著作の絵本を深田久弥山の文化館が制作され、文化館スタッフの大庭保夫会員が優しい語りで披露された。そして夕食懇親会、会費 5000 円、翌日お弁当付き。こんな低料金でと不安いっぱいだったが、ビールもついてボリュームたっぷり懐かしいお味のとんかつ、おいしかった。中能登町の地酒「池月」をはじめ、各支部からの美酒がずらり。清潔な設備と親切な対応、石川県立鹿島少年自然の家は高年齢者にもやさしかった。もちろん石川支部のご配慮、入念なご準備あればこそと、感謝です。ふぐの子糠漬けお土産まで頂いた。

2 日目は大宮坊前の石動山資料館迄車で移動、伊須流岐比古神社に参拝後、多根道グループと史跡探訪グループに分かれ行動する。私は笠谷さんと共に多根道を歩く。石動山へは能登、越中より入る口が七口あり、年代により八口になり、名称も変化するとのことだが、七尾城山からつなぐ道が多根道であった。渓流沿いの道は荒れていたそうだが 2022 年に整備され、危なそうな木橋にはアルミの足場など補強され歩きやすくなっていた。のどかな田園地帯に出ると間もなく多根伊弉那岐（たねいざなぎ）神社、手配の車で大宮坊に戻る。七尾まで行かず、2 時間ほど石動山側だけを歩かせてもらった。伊原さんは、石動山山頂と史跡探訪。山頂へは結構な登りだったよう、中能登町ふるさと創修館の方のご案内での遺跡巡りはとても充実、ちょっぴりハード

とのことだった。

復元された大宮坊（一山の支配・運営・京都の本山との交渉、年中行事などの膨大な寺務が処理されていた）に、両グループ集結して昼食。金沢芝寿しの豪華幕の内弁当を大宮坊前広場の礎石に腰かけていただく。穏やかな秋の日差し、幸せだった。集合写真を撮り次回福井支部開催での再会を約し解散となった。

山頂付近には見事なブナ林もあり、なじみの富山支部の方がご案内しましょうと言ってくださったけれど、3連休の最終日、一番遠い京都、奈良からもの参加であり、石動山資料館を見学して、富山側氷見に出て帰途に就く。（氷見は富山では一番地震被害が多かった）

集会受付前に登った「碁石ヶ峰」は富山湾、立山も見える展望いい山とのことだが当日は雲の中、石動山は思いのほか山岳宗教の雰囲気が色濃く残る山だった。能登の復興に時間はかかるであろうが、ともにぜひ再訪を果たしたい。他の能登の山々も訪ねてみたい。

福井の次は京都・滋賀支部。世の中は穏やかであろうか。この度の石川支部の方々のような隅々までのご配慮ができるであろうかとプレッシャーは強いが、元気に温かくお迎えをしたい。

令和6年能登半島地震で亡くなられた方に心より哀悼の意を表し、被災された方にお見舞い申し上げます。一日も早い復興を願うばかりです。

実施日：2023年11月4日（土）～5日（日）
石川支部支部長リーダーと共に
参加者：伊原哲士、笠谷　茂、津田美也子

五支部集合写真（石川支部主催）

（タムシバ）

健幸登山教室 2023-9

御在所岳

宮井秀樹

これまでの山行記録を調べると2017年5月に「中道登山口～御在所岳～国見岳～藤内小屋～中道登山口」を歩いているので6年ぶりの御在所岳となる。

10日にサハリンの東にある低気圧から九州北部まで長々と延びていた寒冷前線は太平洋へ抜けていったが、勢力の強いシベリア高気圧（1058hPa）による木枯らし1号が吹き、初冬を思わせる山行となった。因みに、近畿地方の木枯らし1号とは霜降（10月24日頃）～冬至（12月22日頃）に吹く風速8m以上の強い北風である。

7時にJR南草津で待ち合わせ、8:20頃に予定していた裏道登山口フェンス前に到着したがフェンス内が工事中で入れず、駐車場所を探して蒼滝トンネルを抜けた更に西側の路肩に駐車場所を見つけ、装備を調えて裏道登山口へ向けて出発した。

日向小屋まで行くと景色が一変。2008年9月の豪雨で流されてきた無数の巨大な岩が積み重なっていて、自然の威力のすさまじさに畏怖を感じる。藤内小屋へ向けて沢に沿って登って行くと北の空から青空が広がってきたが、下層の雲（積雲）の流れが速く国見峠から山頂の風が心配となった。藤内小屋で小休止してから、沢筋の登山道を延々と続く岩を一つ一つ乗り越えながら国見峠に到着。ここからはザレた登山道となり雨水でかなり浸食している。左右が荒れ地となって見晴らしが良くなり、北東には御嶽山が見えた。山頂公園からスキー場を経由して御在所岳山頂に着くと、そこは大勢の人で賑わっていた。午後からは等圧線の間隔も広がっていったので、心配した強風は無く、記念写真を撮って昼食休憩となる。

御在所岳山頂にて

気温は9℃で、予報より高く日差しもあったので寒さはあまり感じなかった。来た道を下山して、予定より早く16:00に裏道登山口に到着した。

コースタイム：登山口（9:00）→日向小屋（9:10）→藤内小屋（9:40）→国見峠（11:30）→山頂公園（12:00）→御在所岳山頂（12:20～13:00）→国見峠（13:40）→藤内小屋（15:15）→登山口（16:00）

実施日：2023年11月11日（土）
参加者：松下征文（L）、土井文雄（SL）、藤綱珠代、宮井秀樹、（準会員）上野陽子、（友の会）尾形利香、（一般）尾形基和

北山探訪

シンコボ（Ⅲ永谷）
揚水発電所計画に消えた集落から芦生研究林最北のピーク周回

笠谷　茂

シンコボ（811.5m）は、京都･福井の境、由良川源流域、京大研究林の北端から名田庄方面に延びる尾根上に位置する。北山のマイナーピークだ。この山へ福井県側の廃村永谷から周回するコースを計画した。入山にあたり、移動時間を考慮し山麓でテント泊、翌早朝から行動するプランとした。

昭和40年代、関西電力が計画した100万kwh級の大規模な揚水発電所建設計画（芦生挙原揚水発電計画）に揺れた集落は、昭和60年全戸が立ち退くことになる。その後、揚水発電所の計画は消滅したが人々は戻ることなく今は廃墟が残る。

11月11日（土）15時におおい町名田庄あきない館前に集合、宿泊予定地である出合小学校跡に向かう。現在その跡地の広場は苔で覆われ、出合小学校が明治6年に開学し昭和63年に廃校となったことを刻む記念碑が建っている。

暮れが始まる16時40分より私たちのテント村では各自準備した食事と飲料で夕食が始まる。心配(覚悟？)していた雨も落ちてこない。暮れ行く中で木々に囲まれた広場がステージに変わっていく。頭上をモモンガが滑空する。いつしか雲間から星空が顔をだす。会話が弾む。就寝後も鹿の鳴き声が響いた。

11月12日（日）6時10分、テントを撤収し車で出発。廃村となった永谷集落跡に駐車し出発の準備を行う。朽ち始めた建物、電線のない電柱。生活が消えて40年の月日を感じる。6時55分出発。集落跡を過ぎ林道を進む。堰堤をすぎ、林道終点（・289）からは沢沿いの踏み跡を辿る。右岸に栃の巨木が現れる。（・379）、8時20分着。沢は二股となっておりその間の尾根に取りつく。踏み跡は所々途切れるが概ね尾根線に沿って続いている。植林と自然林が交錯する美しい尾根だ。

9時35分、府県境でもある野田畑峠着。由良川源流に広がる河原と隣接した峠。植林帯を抜けて現れる目の前に広がる光景は別世界だ。我々は源流に沿って広い河原を進むこととする。

シンコボ山頂（基準点名：永谷）にて

出合学校跡にて

廃村永谷

流れに沿って晩秋の木々が織りなす空間を心地よく進む。標高720m付近の鞍部から尾根に取りつく。北には若狭湾が見える。やがてユズリハのトンネルを抜けると研究林北端、源流でもある標高800mの分岐ピークに着く。シンコボまではあと200mほどだ。11時、シンコボ山頂着。程よい広さの空間に苔でドレスアップした三角点が迎えてくれる。

少し雲行きが怪しくなってくる中、昼食をとり、記念写真撮影後雨具を付け、山頂から北北東に分岐する永谷集落の南に延びる枝尾根へ向けて11時30分に出発。ピーク直下は急な下りで50mほど下ると尾根らしくなる。下る尾根を間違えないよう注意を払い下っていく。心配した雨に降られることなく12時30分、廃村永谷着。集合場所であった名田庄まで車で戻り解散となった。

季節が秋から冬へと向かう中、11月11日未明には、近畿地方で木枯らし1号が吹き抜けた。13日朝には伊吹山、比良山で初冠雪が観測された。その間隙に雨に降られることもなく晩秋の山を参加者それぞれが楽しむことができた。

実施日：2023年11月11日（土）～12日（日）
参加者：笠谷　茂（L）、田中昌二郎（SL）、竹下節子、
今中三恵子、藍野裕之

未知の山旅シリーズ（第13回）
青ヶ島、八丈島、八丈小島
（黒潮洗う絶海の孤島と無人島の頂へ）

笠谷　茂

2023年度秋の未知の山旅シリーズの行先は、これまでとは趣向を変え上陸が困難な島の頂を目指し、中継点となる八丈島から青ヶ島と八丈小島とした。

＜予定ルート＞
11月19日（日）：
東京竹芝桟橋（集合）⇒八丈島へ（船中泊）
11月20日（月）：
八丈島⇒青ヶ島、PMトレッキング、青ヶ島（泊）
11月21日（火）：
AMトレッキング、青ヶ島⇒八丈島、八丈島（泊）
11月22日（水）：
八丈島⇒八丈小島、大平山登山、八丈小島⇒八丈島（泊）
11月23日（木）：
八丈島トレッキング（八丈富士、三原山）
11月24日（金）：八丈島⇒東京竹芝桟橋（解散）
＜天候などを考慮した予備日程＞
11月20日、青ヶ島便欠航時は八丈島（泊）、八丈島止り（青ヶ島へは行かない）
11月22日、八丈小島渡船欠航時は八丈島トレッキング、八丈小島は11月23日に順延

実際の行動は、初日の八丈島への船が欠航となり三宅島で下船。青ヶ島行きは断念し、20日は三宅島トレッキング、21日は八丈島三原山トレッキング、22日は八丈小島大平山（おおたいらやま）登山、23日は八丈島八丈富士トレッキングとなった。離島ならではの習慣や火山との営み、自然の造形美を堪能することができた。竹芝桟橋発着の費用@6.8万円／人（宿泊、移動）。

11月19日、冬型の気圧配置が崩れ、京都は快晴。東京竹芝桟橋へ向かう。20時過ぎ旅客ターミナルに着くと22時30分発の船は天候の影響で八丈島へは欠航となり三宅島行きとなっていることを知る。この時点で目的地の一つである青ヶ島への上陸の可能性は断ち切られた。しかし、ここで立ち止まっても始まらない。私たちはターミナルにあった三宅島のパンフレットを手に三宅島行きとなった船に乗り込む。

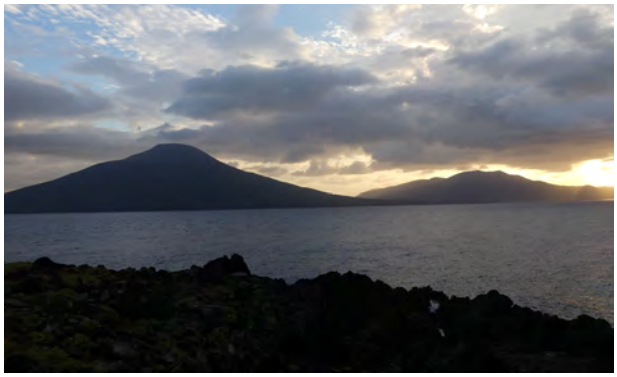
11月20日、船は5時に三宅島三池港に着岸、乗客とコンテナを降ろすと、6時に東京竹芝桟橋に向けて出港していった。無人となった旅客ターミナルで三宅島での行動を考える。まず坪田地区にある民宿「いけ吉」を予約。8時20分にレンタカー屋に電話が通じ、港に迎えに来てもらった。軽自動車を借りて宿に荷物を預け時計回りに島を周回する。最初に島南部にある大路池を訪れた。周囲1.6kmほどの火口湖で、周回路の傍らにあるスダジイの巨木「迷子椎」は圧巻であった。次に、雄山（775m）に近づくため立ち入り制限のない最高点でもある七島展望台（標高500m）へ。村道雄山線を進むと荒涼とした雄山の全貌が現れてくる。しかしあまりの強風に即刻下山。阿古地区の食堂で昼食をとり、錆ヶ浜港前の観光協会を起点に火山体験遊歩道と噴火口コシキの穴をトレッキング。車で周回を続け宿に戻った。噴火を繰り返す島のダイナミックな景観に感嘆した。

11月21日、4時に宿を出発。宿のご主人に伊ヶ谷港まで送っていただき、八丈島行きの船に乗り込む（5時）。船は9時に八丈島底土港に接岸する。この日は三原山へ行くこととした。タクシーで大賀郷にある宿（長戸路旅館）に行き、レンタカーを手配、三原山（701m）に向かう。底土側から舗装された林道に入り、2本の電波塔が立つ頂上直下まで車で行くことができた。電波塔の下で昼食（12時40分）。頂上からは八丈富士、

八丈小島そして遠方（約 70km）に青ヶ島が望めた。そして眼下には直径 1km に及ぶ爆裂火口広がる。宿への帰路、大坂トンネル出口から見た八丈小島の絶景に期待が高まる。八丈小島へは、優宝丸（船長の奥山文則さんは八丈小島出身：1969 年島民全員が離島したとき小学生）にコンタクトしていた。宿にて 6 時 30 分出航予定なので 6 時に八重根魚港へ行くようアドバイスを受けた。

11 月 22 日、曇り時々雨の予報。5 時 45 分に宿を出て八重根魚港まで約 1km の道を進む。6 時過ぎ、乗船する優宝丸前で待っていると 2 名の釣り人、そして船長が現れた。早速エンジンを始動し出港準備。優宝丸は 6 時 20 分八丈小島に向かい出航した。大平山へのアプローチは北側の鳥打集落跡と南側の宇津木集落跡からがあるが、事前に入手していた情報をもとに北側からの入山を想定していた。しかし、船長から南側の船着き場で降りるよう指示を受けた。「下船後、歩道を進み学校跡を過ぎると為朝神社への道が続く。途中で分岐があり左に進む。笹薮が続くがピンクの標識テープに沿って行けばよい。山頂までは 2 月に（船長自身が）整備したが笹薮はそれから延びているだろう」とのこと。6 時 50 分、船着き場着。船首に装着したタイヤを岩場に押し当て揺動を抑える中、その船首より八丈小島へ上陸した。迎えは 16 時だ。優宝丸を見送り、宇津木集落跡の台地へ登る。その入口には「東京都鳥獣保護区特別保護地区」の標識が立っていた。台地のシチュエーションに八丈小島上陸を実感。朝食後、山頂に向けて出発（7 時 20 分）。明瞭な歩道を進むと八丈島が良く見える学校跡に着く。刈り込まれた歩道を先に進むと分岐が現れここを左折。刈込に沿ってピンクのテープが誘導してくれる。径は細くなるが足元には石段などの痕跡が残る。・201 の上部で尾根に乗ると傾斜は増し笹薮も濃くなる。笹を手摺り代わりに高度を上げていく。標高 500m 付近の台地を越え最後の斜面は西側から回り込む。標高 570m を過ぎると笹もなくなり視界が開け眼下には海。踏み跡を辿るとやがて大平山（616.8m）の頂に着く（10 時 30 分）。頂上は草が茂り三角点の標石が隠れていた。藪漕ぎ用に持参した鋸で草を払い記念撮影。山頂付近はガスが行き交う状態で、雨がやや強くなることがある中、時折顔を出す八丈島と八丈富士、三原山の頂上付近は雲がかかっていた。11 時 30 分、頂上を後に下山の途につく。13 時 20 分、学校跡まで戻り昼食、14 時 20 分、宇津木集落跡の台地に戻り優宝丸の迎えを待つ。ここでの営みに思いを馳せる中、緩やかに時間は流れた。優宝丸の船影を確認し船着き場に移動する。16 時 10 分、着岸した船首から優宝丸に乗り移る。16 時 40 分、八重根漁港着。宿に向けて歩き出すと奥山船長が車で通りかかり、私たちを宿まで送ってくれた。この数分の車中で、宇津木側からの登山となった理由を知る。鳥打側にはクロアシアホウドリがやってきて営巣するため、10 月から 4 月までは入島を制限しているということだ。宿に着き調べてみると、2013 年 4 月に奥山船長が八丈小島でクロアシアホウドリを発見。現場を見た鳥類学者の樋口広芳東大名誉教授は、「クロアシアホウドリが来ると、近縁種で特別天然記念物のアホウドリもやって

大平山



八丈小島宇津木集落跡の朝（八丈富士と三原山を望む）

八丈小島歩行ログ

くる可能性が高い」と発言。以降調査、保護活動が行われているという。1969年の島民離島後家畜だったヤギが野生化し土壌は裸地化、ヤギの駆除が2002年から行われ2007年にはヤギはほぼ絶滅したと考えられている。そしてクロアシアホウドリの飛来、営巣する島に変わっていった。今後に思いを馳せ、島の南側からの登山道を整備されている奥山船長の故郷への熱い思いに感銘した

11月23日、伊豆諸島の最高峰の八丈富士（854.3m）トレッキング。天気は快晴。8時5分、タクシーに乗車。7合目登山口（標高545m）で下車（8時20分）。準備を整え出発（8時30分）。山頂に延びる登山道からは市街地と背後に聳える三原山、両側には太平洋が広がる。展望を楽しみながら進むとやがて傾斜が緩やかになり外輪山にある分岐点（標高810m）に着く（9時20分）。直径400mのお鉢を時計回りに進む。右側は火口の断崖で、表情を変え自然の造形美を見せてくれる。左側は安息角で眼下に裾野が広がり海へとつながっている。最高点には石の標柱があり、その20mほど西に三角点がある。ここで外輪山の西側背後に八丈小島の頂上が顔を出す。更に足を進め、海上に浮かぶ八丈小島の全貌が現れると、昨日の記憶と共鳴しみんなで歓喜。一方外輪山の内側はすり鉢の底まで見えてくる。木々に覆われた神秘的な世界だ。眼下100mの樹冠の輝きが目に焼き付いた。やがて一周し分岐に戻る（11時5分）。お鉢内にある浅間神社を往復し下山の途につく。12時20分、7合目登山口着。帰路は宿まで歩いて戻る。

11月24日、タクシーで底土港に向かう。9時20分、船は「八丈太鼓」の見送りを受け出航。東京湾内以外は良く揺れた。竹芝桟橋に19時55分に着岸。下船後旅客ターミナルにて解散。感動が詰まった未知の山旅2023年秋を終えた。

一緒に未知に触れた、山旅に参加いただいた仲間に感謝、そして八丈小島からの素晴らしいニュースを期待する。

八丈富士からの八丈小島

実施日：2023年11月19日（日）～24日（金）
参加者：笠谷　茂（L）、関本俊雄、竹下節子、
（友の会）中塚智子

秋のスケッチ
嵐山から愛宕山を描く

松田敏男

「小春日和とは今日のことなり」と見得を切っても良いほどの穏やかな暖かい日でした。でもでも、肝心の愛宕山に目を向けると……なんとまあ薄ぼんやりだこと！ここまで春霞を演出していただかなくてもいいのにと思いたくなる恨めしい日和でもありました。ただでさえ岩壁とか雪渓とか描きやすい景色ではないのに、難度がアップします。好き勝手に描いてしまえと、居直るしかない心境になりました。愛宕山に光が当たるときもあれば、前の低い山だけ明るくなって愛宕山は青く沈んだり、日差しを浴びて輝く紅葉の斜面が部分的に輝いたりと、めまぐるしくスポットライトが移動するような難儀な景色でした。

それでも皆さん熱心に描いておられますので、独りだったらすぐにギブアップするところなのですが、頑張りました。2時間ほど悪戦苦闘してなんとか仕立て上げて一応打ち止めにしました。紅葉シーズン真最中なのでごった返す人出でしたが、山田さんが設定されていた広場はびっくりするほど閑散としていて、集中することができました。

お昼ご飯はこの近所ではとても無理と思っていたのですが、さすが山田さん、穴場を知っておられました。右岸上流の船着き場の店です。座席はすぐに確保でき、料理が運ばれてくる間に皆さんの絵を拝見して加筆しました。同じところから描いていても四人四様なのが絵の面白さです。水溶性クレヨン、水溶性色鉛筆、透明水彩、私だけは昔ながらの色鉛筆で3名の方々は一様に水彩になる描画具ですが根元が違うので表情に違いが出ます。それが絵を描く時の楽しみのひとつです。

鍋焼きうどんで温まり、帰路につきました。

スケッチ山行を始めて30年が経ちましたが、記録が見つかりました。抜けているところがあるかと思いますが、皆さんで補完しながら30年間に思いを馳せてくだされば幸甚です。

1回目から5回目までは内田さんと久我さんがリーダーをされました。6回目からは現在に至るまで山田さんがずっとリーダーを受け持ってくださっています。感謝申し上げます。

愛宕山

山を描こうとすると山の姿を凝視します。そうすることによって深く山に入り込んだような錯覚も生まれ思い出がよみがえったりもして、楽しいものです。以前参加されていた方、再訪の山に行くという気持ちで再度参加していただければと願っています。また、初めてという方、上手く描けないといった悩みなぞ蹴っ飛ばして参加してください。お待ちしています。

実施日：2023 年 11 月 24 日（金）
参加者：山田和男（L）、中川　寛、（準会員）上野陽子、松田敏男

スケッチ山行 30 年の記録

	年	月・日	行先	描く対象の山	宿泊地	人数
1	1992	2.16	奈良 曽爾 亀山	鎧岳など		19
2		4.29	丹波高原 小金ヶ岳、三岳	小金ヶ岳		9
3	1993	5.23	曽爾　老人福祉センター駐車場	鎧岳など		10
4		10.31	鈴鹿 入道ヶ岳	鎌ヶ岳		9
5	1994	5.8	北山 桑谷山	峰床山など		14
6		12.10～11	伊那谷 下栗。2日目御池山	聖岳	高原ロッジ下栗	12
7	1995	10.14～15	野麦峠スキー場	乗鞍岳	アルペン野麦	12
8	1996	5.25～26	野麦峠スキー場	乗鞍岳	アルペン野麦	10
9		10.19～20	上高地	焼岳など	上高地山岳研究所	8
10	1997	5.10～11	八ヶ岳支尾根 八方台	八ヶ岳	渋辰野館	9
11		9.27～28	伊那谷中央アルプス側 宮田高原	南アルプス	宮田観光ホテル	12
12	1998	5.9～10	剱岳西麓 中山。2日目松尾平	剱岳	上市鉱泉（馬場島）	11
7.21～26　スケッチ展　寺町三条下る/ギャラリーF						
13	1999	5.8～9	富士山麓。2日目秋野不矩美術館	富士山。浜名湖	浜北市 森の家	8
14		10.31	鈴鹿 宮妻峡林道	鎌ヶ岳		10
15	2000	5.27～28	入笠山	樹木（霧）	マナスル山荘	11
16		10.28～29	大山山麓 豪円山	大山	雄峰ペンション	11
17	2001	10.13～14	御岳 開田高原	御岳	ペンションJ.ハウス	12
18	2002	4.13～14	旧安房峠	穂高連峰	中の湯山荘	8
19	2003	5.17～18	野麦峠スキー場	乗鞍岳	アルペン野麦	8
20		10.25～26	入笠山	甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳	マナスル山荘	4
21	2004	5.15～16	北アルプス 八方尾根	白馬三山など	八方池山荘	5
22		11.13～14	剱岳西麓 中山	剱岳	馬場島荘	7
23	2005	11.26～27	南アルプス 鹿嶺高原	甲斐駒、仙丈岳	仙流荘	6
24	2006	5.20～21	白馬村	白馬三山	P.エルマージョ	5
25	2008	5.17～18	乗鞍高原	乗鞍岳	牧水苑	7
26		10.25～26	御岳 開田高原	御岳	アルペン野麦	5
27	2009	5.16～17	北杜市 清春白樺美術館	樹木など（雨）	志満屋	5
28		11.14～15	安曇野 苗場スキー場跡	青木湖など	陀羅仏小屋	4
29	2010	5.8～9	北杜市 清春白樺美術館。神代桜	甲斐駒ヶ岳、鳳凰山	志満屋	7
30		10.23～24	糸魚川 海谷山地。白馬村	鬼ヶ面山。白馬三山	Pブルー	5
31	2011	5.14～15	シャルマン火打スキー場	権現岳(妙高高原の北)	長者温泉ゆとり館	4
32	2012	11.10～11	鹿嶺高原。白馬村	仙丈岳、白馬三山	P.エルマージョ	4
33	2014	11.13	広沢池	愛宕山		4
34	2015	10.16	宝ヶ池	比叡山		3
35	2016	5.6	びわこ大橋西詰 米プラザ道の駅	琵琶湖など		6
36		10.27	近江舞子	堂満岳		5
37	2017	5.1	奈良 曽爾	鎧岳		5
38		10.25	奈良 曽爾	鎧岳		5
39	2018	5.9	広沢池	愛宕山		6
40	2019	3.24	近江長岡駅ホーム	伊吹山		6
41		10.10	宝ヶ池	比叡山		6
42	2021	5.23	嵐山	愛宕山		4
43	2022	4.22	近江蒲生野	太郎坊山		5
44		10.13	湖南 金勝アルプス	天狗岩付近		6
45	2023	5.15	宝ヶ池	比叡山		5
46	2023	11.24	嵐山	愛宕山		4

写真サークル

晩秋から初冬の京北へ

上野陽子

第３回の写真サークルは京北町。当初予定の片波川源流ガイドウォークは雪が降ると危険なため 11 月までと。雪がなければガイドをお願いできないかとリーダーが掛け合いに赴いてくださいましたが来年の楽しみとなりました。今回は“京北町の晩秋～初冬の景色”をテーマに、落ち葉の美しい神社と橋を撮ることとなりました。

12 月３日朝８時に西京極駅で今回メンバー４人が集合。リーダーの車で出発。いつもの様に和気あいあいと楽しい会話で車は進みます。途中、高雄を通ると真っ赤な紅葉が見え、すでに撮影スポット。車窓から皆で景色を楽しみました。杉の丸太が沢山立てかけてある建物が点在し、北山杉の発祥はこの辺り、中川と聞きました。毎回、先輩方が道中でもいろんな事を教えてくださりとても楽しい時間。そこから 15 分程、小野郷集落に入ると、細い道沿いに黄色の絨毯を敷きつめた神社に到着。今回の第一目的、岩戸落葉神社です。わぁ素晴らしい！　皆声を上げ、急いで車を降ります。輝くような銀杏の黄色に鮮やかな紅葉の赤。清らかな美しい神社。源氏物語の落葉の宮の閑居と。もうこの景色だけでうれしい。台杉が生垣の様に植えられて、これもこの地域で発展したと教わりました。思い思いに撮影。杉林前の真っ赤な紅葉を見上げる先輩の姿。先輩方は地面に体を付けて、流石の構図。撮れた写真を見て笑顔で幸先の良いスタートです。次の吊り橋に向かう前に、周山の道の駅に寄り、名物のきなこをまぶした納豆餅を食べて出発。10 分程で、魚が淵の吊り橋に到着。橋の近くには京北桜 100 選の立派な桜。袂には散り残った紅葉。古びた木の橋の欄干は朽ち、真ん中を気をつけて歩く。風情ある橋と紅葉の絵になる景色。冬の光の中、シャッター音が響く静かな里山。春には花見に人々が訪れるであろう京北十景。京都トレイル京北コース。しばし日本の原風景に浸りました。次は八幡宮社と、続く小学校の校庭にある御神木の大杉へ。参道には樹高 20m 近い 100 選の桜。市内で 1、2 位を争う巨木に歴史を感じ階段を上ると、校庭にそびえ立つ大杉が。樹齢 450 年、幹回り 6.31m、樹高 32.5m の天然記念物。大木の側で育つなんて幸せだなぁと見上げる、天上の木。大杉と校舎の並ぶ光景を収め本殿へ。859 年創祀とあり皆で歴史の話。ここにも京都トレイルの案内板。滝や古道、北山杉の森、パノラマも京北を楽しめるコースです。そろそろ 11 時。お勧めのお蕎麦屋さんに行き全員、十割蕎麦と鯖寿司で大満足。

賀茂神社参道

大きな窓から野鳥が見えてリーダーの解説にいつもながら感動。空に雲が広がってきて出発です。畑の広がる道を 10 分ほど走り山国神社に到着。明治維新の際の官軍、山国隊の出陣の誓いをなした神社。小さな本殿を背の高い下の方は枝を落とした 20 本程の北山杉が取り囲み、静かに整然とした雰囲気を撮影したところで、少し雨が降り出し、賀茂神社へ移動です。中江集落の背後の山の中にひっそりと佇む神社はパワースポットだそう。鬱蒼とした杉木立の間に真っ直ぐの参道。苔むした階段に銀杏の落ち葉が浮かびあがって、数百年前から変わらない様な神秘的な景色。なぜか誰もが無言でシャッターを押しました。雪から守るため覆屋の中に社殿があり、案内には、出来れば最後にお願い事が叶う様に3回廻りお辞儀をしてと書かれていました。いつの間にやら雨もあがり、最後の目的地、すぐ近くの沈下橋へ向かいました。元々、木でできた橋はコンクリートに変わり大雨でも流されない 3m 程の幅。渡った先の川べりのすすきや草の中に綺麗な紫のヨウシュヤマゴボウを見つけ、各々の角度で違う雰囲気に撮れた写真を見せ合い撮影は終了しました。

道の駅に戻り、見たこともない大きななめこを皆買い、楽しかった一日を振り返りながら洛中に戻りました。京都市中から数十分で、自然豊かな京北があるのを知り、素晴らしい景色や歴史を感じ、美味しい物も頂いた盛り沢山の一日。撮影も批評会で勉強して良い写真が撮れる様に頑張りたいです。

下見から運転、様々教えてくださった頼れるリーダー、いつも色々教えてくださる先輩方、素敵な一日をありがとうございました。

実施日：2023年12月3日（日）
参加者：野村綾子（L）、中川　寛、幣内規男、
（準会員）上野陽子

健幸登山教室 2023-10
リトル比良

上殿弥生

2023年12月9日の健幸登山教室（リトル比良）に参加させていただきました。こちらのコースは近江高島駅に近い場所から案内が出ており初心者の私にも登山口に辿り着きやすい所だと思いました。

当日は天候に恵まれ防寒着が必要なく、「暑いね」「この時期に汗が」という言葉が出るぐらいの快晴でした。

私は経験が少ない分、着る物、持ち物をお会いした方に教えていただくことが多く、今回は女性が参加されており念のための持ち物、着る物などの生地をどう選んでおられるかなどを質問させてもらえた事もとても嬉しく思います。

スタートから松下リーダーの後ろを歩き、それぞれの地形についてや足を置く場所や膝を痛めないよう工夫して歩くことなど、冗談を交えての和やかな会話では行動食を摂る休憩のタイミングと時間配分もとても参考になりました。

リトル比良のコースは観音堂への参拝道として使われていた場所や、お堂があった様子がうかがえる場所があり長い歴史が感じられる道、真っ白な花崗岩が広がる所と普段では目にすることがない数多くの巨大な岩が存在しており目を奪われる場所が多かったです。とてもワクワクしました。

下りのコース近くに滝（楊梅の滝）があり、その滝に繋がる水が湧き出し水流が増えていき川になる景色はそれまでに登山道で見た景色と違い、優しい水のせせらぎと太陽の木漏れ日で光木や草や苔と穏やかなひんやり感が味わえて思わず「きれい！」と声が出る場所が多かったです。

今回のリトル比良のコースは字のイメージからやさしく簡単な道と思ってしまう方もおられそうですが、怖いと思う場所はありませんでしたが、どんな登山道でも必要なしっかりとした体力とアップダウンを繰り返すじゅうぶんな脚力を要する道だと思いました。

素晴らしい経験をさせていただきました。ありがとうございます。

実施日：2023年12月9日（土）
参加者：松下征文（L）、村上　正（SL）、瀬崎暢子、
矢野達子、（準会員）上野陽子、上殿弥生、
（友の会）尾形利香、（一般）尾形基和

12月14日　武奈ヶ岳の日

瀬崎暢子

武奈ヶ岳は比良山地の最高峰で日本二百名山、近畿百名山の一つである。登るルートがたくさんあり、バラエティに富んだ登山が楽しめる。山頂からは琵琶湖や、天気のいい日には遠くに白山がみえ、大パノラマも楽しめるので、何度登っても飽きない山だ。四季を通じて何度も登っている。しかし12月14日が「武奈ヶ岳の日」であると知ったのはJACに入ってからだ。標高に因んだ記念日に登るなんて素敵だと思い参加した。

当日は良い天気で12月というのに暖かい朝だった。レスキュー小屋から青ガレを目指して出発した。はじめはゆるやかな登りでも暖かな気候で汗をかく。隠れ滝にも寄り道をした。行ったことがないのは私だけだったので一人で往復した。登山道からは全く見えないので隠れ滝というのだろうか。なかなかの落差もあり（後で調べたら落差18m）。水は少なそうだが近づくと迫力は十分で、マイナスイオンもしっかり浴びて、爽やかな気持ちになった。青ガレへの道は崩落個所も多く、以前来た時よりも崩れている気がした。いくつかの堰を過ぎ、右にわたると青ガレだ。印の通りに慎重に登る。途中、「ミズメ」別称「ヨグソミネバリ」という樹皮を剥ぐとサロンパスのにおいがする珍しい木を教えてもらった。サリチル酸メチルを含み、昔は湿布薬に使われていたそう。難しい名前でなかなか覚えらえず、途中何度も質問されてやっと覚えた。登山道の脇には太陽に照らされて、ピカピカしているイワカガミっぽい葉っぱもたくさん生えていた。春になったら花が咲いてどんなに奇麗だろうと想像した。岩場を越えたら正面谷の右岸の登山道へと進む。滑落や道迷いも多い場所らしい。確かに下山時はルートを見失いやすい場所だ。分岐では振り返り、歩いてきた道を確認するのも大切だと思った。急なザレ場を登っている途中にふと振り返ると、琵琶湖に雲海が広がっていて非常に美しい景色を見ることができた。急登の途中の癒しになる。

ほどなくして金糞峠に到着した。金糞峠から下りていくと、大きな芦生スギを所々に見ることができる。エイリアンみたいな不思議な形をした木々を見ながら「すごい！！圧巻！！」と感嘆の声を出して歩いた。

コヤマノ岳が近くなるとブナの木が増え、落葉した冬枯れの山は日差しが届いて明るく、カサカサと落ち葉を踏みながら歩くのは気持ちがよかった。山頂にあるシンボル的な大きなブナの木も健在で嬉しかった。山頂で琵琶湖を眺めながら昼食をとり、暖かい日差しを浴び穏やかで贅沢なひと時を味わった。そこから武奈ヶ岳までは30分ほどで着いた。山頂からの景色はいうまでもなく素晴らしいもので、遠くに雪を纏った白山や、伊吹山の奥に乗鞍岳も見えた。こんなに良い天気の日に登るのも久しぶりだったので景色の良さに感動した。山頂付近では、背の低いツゲの木が庭師に刈られたみたいにきれいに丸くなっているのが気になった。鹿の仕業と教えてもらった。その名も「鹿盆栽」。ナイスなネーミングで笑ってしまったけど鹿の食害は深刻な問題だ。イブルキノコバ～八雲ヶ原あたりでは曇ってきて、冷たい風を感じた。八雲ヶ原は季節になるとサギ草が咲き、ウメバチソウも奇麗だが冬は哀愁が漂う寂しい雰囲気だ。北比良峠からはダケ道を下山した。歩きやすい道だが、落ち葉がたくさん積もっていて滑りやすいので慎重に下りた。大山口に無事に到着したのは16時を過ぎてすっかり夕暮れの空だった。新たな武奈ヶ岳の魅力を発見できて、とても充実した一日だった。

同行させていただき感謝です。2024年もまた登りたいのでよろしくお願いします。

武奈ヶ岳山頂

金糞峠より雲海と鈴鹿の山並み

出発8:15→青ガレ9:32→金糞峠10:29→コヤマノ岳11:51→武奈ヶ岳12:55→イブルキノコバ13:47→八雲ヶ原14:13→北比良峠14:33→カモシカ台15:33→ゴール16:45

実施日：2023年12月14日（木）
参加者：松下征文（L）、中尾光利、矢野達子、瀬崎暢子、（準会員）上殿弥生、（一般）斎藤富司、濱田康寛

北山探訪　忘年山行
稲荷山
名物のスズメの串焼きで

田中昌二郎

平日例会山行時代にはじまった忘年山行は、下山地点の公園などで、銘々好みの酒類、肴で忘年宴会をするもので、大文字山から円山公園に始まり、鷹峯三山から沢池などを巡ってきたが、今回は伏見桃山城から稲荷大社に詣で、門前の茶店名物のスズメやツグミの串焼きで忘年会をという趣向である。この京都トレールルートは詳しく紹介されているので、行程の詳細は省略し、今回特に印象的に残ったところを記します。

9時45分にJR桃山駅に集合。当日の天気予報は不安定で、少し濡れることも覚悟の出発だった。桓武天皇陵の入口で平安遷都の天皇に一礼して伏見桃山城から大岩山を目指す。

八科峠（10:50）の標石と車石に感激した。六地蔵を経由して大和時代の都・奈良への古道の峠だったことを知る。下山後ネットを見ると、この辺りは秦河勝の父・秦大津父（はたのおおつふ）の勢力圏であったと言う。

秦氏の本拠は京都盆地の西部の太秦辺りと思っていたが、秦氏の神・稲荷大社がこの地の近くにあることに納得がいった。

大岩山の展望所にて大展望。愛宕山山頂部は雲の中だったが、保津峡から嵐山松尾の山、遠く亀岡の三郎ヶ岳や大阪のビル群　生駒山辺りまでの絶景を楽しんだ(11:30)。

西の空が明るく雲が東へ流れているので、雨の心配はなさそうだと安堵し、夜半の雨で滑りやすくなった急な谷道を下って、堂本印象画伯デザインの石の門に出る。母君の病気平癒を願ってのものというが、今もモダンで異彩を放っている。この東山の山裾、北の清水あたりからの谷筋や岩屋に沢山の社や行場・霊場がある。病気平癒や所願成就を願った庶民の信仰の歴史を感じる。

平安文化華やかな時代の天皇・仁明（ニンミョウ）天皇の深草陵に参拝する。病弱であったというが小野小町との伝説もある御霊に頭を垂れた。

名神高速道の下を潜って、住宅地の中にポツンと残った旧東海道線の線路跡地にも行く。旧東海道線は、京都駅から東山の通過を回避して南下し、この地から山科小野へ東行し、更に北上して逢坂山へ至ったという。名神高速道路はこの跡地に建設されたそうだが、どうしてこの土地だけが残ったのか全く不思議である。

深草の丘陵地に広がる蔬菜畑と竹林は広々とのびやかで感激した。またこのトレイルのために、付近の人々の全くの善意でトイレが設置され管理運営されているとのことを知ってまたまた感激した。竹林を抜け、緩やかではあるが長い丘陵地帯を登って、林間を切り開いた地の三等三角点　点名西野山に着く（13:45)。記念写真撮影の後、曇り空でもう暗くなりかけてきた中を稲荷大社参道へと急ぐ。外国人、それも慣れない着物に草履履きの外国人女性ともすれ違いながら一瀉千里に山を下って、稲荷大社本殿に着く（15:00)。参拝

三等三角点西野山にて

八科峠標石

の後、門前の茶店日野家でスズメ、ツグミの串焼きなどで乾杯する。今年一年の北山探訪のアレコレに話が弾み、来年もよろしくと一年の締めくくりとした。

実施日：2023 年 12 月 16 日（土）
参加者：田中昌二郎（L)、笠谷　茂（SL)、中川　寛、
上田典子、竹下節子、今中三恵子

北山マイナーピーク探訪
灰屋山(△732.8m)

今中三恵子

本年最初の「北山探訪」、に参加させていただきました。

太秦天神川駅集合 7:30。車 2 台で「道の駅ウッディ京北」経由、黒田小学校跡へ移動する。小学校跡は、今では建物のない広場。二宮金次郎の像が隅にあった。道路沿いに数台駐車できるスペースがある。

小学校跡 8:50。小さな鳥居をくぐって歩き出す。地形図では尾根沿いに破線の道があるが、少し西側によく踏まれた道があったので往路はそちらをとった。程なく「黒田展望」9:45。ここで尾根からくる道と一旦合流した。気温は 0℃を下回ったが風もなく寒さは感じない。伐採された木の断面からつららがぶら下がっていた。初めて見る。他の方々にもめずらしいようだった。木に含まれた水分が出てきて凍ったのか。踏まれ

た道は旧道らしく、ジグザグにとるところもある。傾斜を緩やかにしたのだろう。また、鋭角に曲がるところでは目印になる大木が残されていた。

トロ峠 10:00。この先急阪を登る。積雪はないが、水を含んだ落ち葉が凍り、パリッ、シャキっと不思議な音がした。

黒田防空監視哨跡（*1）10:30。木でできた櫓が設けられていた。ここで展望が開けた。

灰屋山（三等三角点 732.8m　点名：宮）10:40。灰屋山、監視哨山など記載の札が複数あった。35 年前に登った折、地元古老は「津の谷頭」だとも。山名はどのようにつけられるのか。

監視哨跡に戻り昼食とする。風なく、眺めも日当たりもいい昼食地だった。北から東のほうに、北山や比良の山々が望めた。櫓に上がるとさらに良く見通せた。のどかで平和なこの場所で 24 時間敵機を監視していたなど、想像つかない。

復路は尾根筋をとった。この道が地形図に破線で表されている。が、踏み跡あまりない。地図と磁石、また、GPS を見ながらの下山となった。

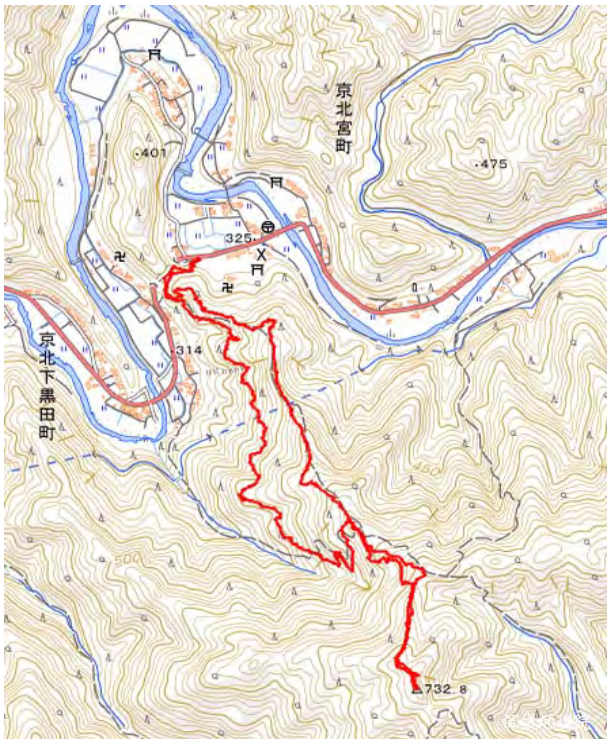
小学校跡 12:30。

道の駅ウッディ京北　コーヒータイム＆ミーティング

太秦天神川駅　解散

*1　大日本帝国陸軍の、敵機を遠く発見し、これを防衛司令官に報告する監視哨である。

つらら



ルート

実施日：2024 年 1 月 23 日（土）
参加者：八木　透（L）、笠谷　茂（SL）、田中昌二郎、大槻雅弘、山崎　泉、今中三恵子

灰屋山頂上集合写真

最終回　健幸登山教室 2023-11

マキノ赤坂山

村上　正

行程：マキノ高原登山口⇔ブナの木平⇔粟柄越⇔赤坂山（ピストン）
講習内容：ワカン・スノーシューでの登下降・雪の遊び方

霙とも小雨ともつかぬ紛らわしいなか、午前 8 時 30 分マキノの登山口駐車場に集合し自己紹介と、本日の講習内容をリーダーより説明。

約 5 年間で 39 回目となるこの講習会も今回で終了する。最後の最後で万が一の事が起こらないようチーフリーダー・サブリーダー共に気を引き締めて 9 時に出

赤坂山山頂にて

発する。これで終わりかと思うと伝えたい事が多く、ついスペシャルバージョンになってしまう。旧マキノスキー場の緩やかな登りは足慣らしに丁度よい。取り付きでワカン講習を始め、装着取り付け及びバンドの調節を指導したので予定の外時間が掛かった。私のワカンは昔の紐式なのでフリーサイズだが、最近の物は予め調節をしておく必要がある。初心者は知識が浅いので（予め調節をしておきなさい！）と言っても無理である。当然、説明にも時間は掛かったが、後々のトラブルは未然に防げる。歩きながらストックのセット長さに付いて説明をしたが、身長に合った適切な長さに馴れるまでは時間が掛かりそうだ。この頃には霙も止み青空が広がる、急登は 20 分強で終わり尾根に出ると傾斜も緩くなり東屋に着くが、この時期にして雪が異常に少なく壺足に切り替えても良い講習になったようにも思えた。壺足は壺足で、機会をみて講習をする必要があるだろう。やがて砂防提に着き 20m ほど登り返せば林道跡に出てジグザグの登り道を辿り、風当たりの少ない雪溜まりで昼食にした。粟柄越の手前に立つ鉄塔とは目と鼻の先、稜線の風に備えて汗をかいた身体に防寒具を重ねて赤坂山を目指す。赤坂山山頂 13 時 30 分着。風も弱く 360 度の展望に癒され、来た道を辿り下山を開始する。砂防提までワカンを装着したままで下り、そこから壺足に切り替える。16 時全員下山し講習を終える。

実施日：2024 年 1 月 27 日（土）
参加者：松下征文（CL）、村上　正（SL）、藍野裕之、
　　栗野雅巳、瀬崎暢子、矢野達子、
　　（準会員）上野陽子

★追記文責：村上正

健幸登山・赤坂山報告の稿でありますが、今回で終る健幸登山を振り返り、この紙面をお借りして書かせて頂きます。当初、この取り組みについて松下氏から聞いた意味は「山登りをすることで健康と幸せを！」だったと思います。そのスローガンを手にするためには基礎知識の講習が必要で、安全のための登山教室を意図した山行を企画し実施してこられました。会員の拡大も視野に入れて。この間、基礎の岩・沢・読図等、約 5 年で 39 回におよびます。いろいろ口にするのは簡単ですが、ひとつの事をやり遂げるその意志は簡単に真似ができるものではないと思います。氏が行われてきた労力を労い、お礼と共に氏に感謝致します。発案、企画、実施は元支部長の松下征文氏が全てリーダーをされています。山行例会ではなく、一般の登山愛好者にも呼び掛けた登山教室ですから何時も重荷を担いで居られたことと思います。

この間、村上と土井はお手伝いをさせて頂きました。その経験を活かし、何某かの形で氏の思いを伝承し登山活動を続けていきたいと思います。
「大きな事故もなく無事に終えられたことに安堵する」

健幸登山教室終了の言葉

松下征文

永年いろんな形で登山講習会を行ってきましたが、健幸登山教室もその一つでした。

2024 年 1 月 27 日の赤坂山ワカン、スノーシュー登山で終了しました。期間中多くの方にお手伝いいただき感謝の気持ちでいっぱいです。

参加された方に何を伝えられたか、少しでもその後の山行のヒントになり得たでしょうか、お役に立てば望外の喜びです。

山も一瞬のミスが後悔の元となります。安全登山はありえません。登山は危険な行為と意識してください。

これからも、より楽しい山登りが出来ますように応援しています。

松下は山遊びの最終章を「岳 - 逍遥」として山に入っていく予定です。あえて山頂は目指しません。安全確保のため、ヘルメットハーネス、補助ロープ必携です。さて、どんな遊びとなる事でしょう。

京滋支部の皆さんありがとうございました。

インタビュー「この人に聞く」

第2回　酒井敏明顧問

聞き手：野村綾子

酒井敏明顧問

京都支部（現、京都・滋賀支部）第２代支部長、1932年生まれ。人文地理学者、帝塚山大学名誉教授。著書に『旅人たちのパミール』『世界の屋根に登った人びと』他。

インタビューを依頼したところ、「最近は耳が聞こえにくくてね」とメールでお答えいただきました。

Q：山岳部に入部されたきっかけは何ですか？

1948年に学校教育制度が施行され、私は新たに発足した公立中学校・高等学校に進学することになり、京都では公立新制中学校および高等学校は総合制・地域制・男女共学制を三大原則としたので、私は府立三中3年の２学期でしたが府立山城高校ではなく府立鴨沂高校の併設中学校３年に転校したのです。1952年３月に鴨沂高校を卒業、新制京都大学の入試に合格しました。１回生が通学していた宇治木幡にあった宇治分校へ山岳部員が新人募集にやってきたとき、入部を申し込んだのです。最初の本格的な山行が夏の剱沢の真砂子沢出合キャンプ地をベースとした合宿生活でした。その準備に吉田キャンパスの山岳部ルームを何度か訪れるうちに、そこにいた上級生部員たちとルームが醸し出す雰囲気がすっかり気に入って、選択は正しかったと思います。

Q：一番思い出深い山は？

北アルプス、剱岳の思い出が一番深いといえるでしょう。

私にとって最も重要な山行は３回生春の毛勝３山から剱岳山頂まで、剣岳の北方稜線を冬季初トレースした山行である。

（剱岳の北方稜線を冬季初トレースというのは当時の装備を考えても相当な苦労があったことでしょうね）

先輩たちが以前から胸にあたためていた宿願を実現したともいえる、当時の部員とOBたちが共同して案をねった総仕上げ的な登山という意味あいがあった。剱岳から、より正確を期して言うなら池平山2561mから北北西に延びる稜線は、2300～2400mの高度をたもちながら約15km先に毛勝山2414mを起し、その先はぐっと低くなり最後は黒部川三角州平野に移行している。20世紀初頭のころから南極大陸の極点初到達を競うヨーロッパ諸国の探検隊は本隊根拠地からあらかじめいくつもの前進基地を順次設営し、最終的にえりすぐりの隊員が目的地到達を実行する戦法を極地法と呼んでいた。ヨーロッパアルプスのような山岳地域ではなく、ヒマラヤやカラコルムなどアジア奥地の高山を対象とする探検登山も極地探検とほぼ同時期にはじめられ、エヴェレスト、カンチェンジュンガなどに挑んだ各国登山隊も巨大で高峻な未踏峰において、ベースキャンプから前進テントを順次数か所に建て、最終テントから頂上往復をねらう登頂隊を送り出す方式を採用した。極地法登山とよばれるものである。第二次大戦終了後活動を再開した我が国大学山岳部の中には将来の外国山岳地への遠征登山を実現することを夢見ながら、北アルプスの各山域で新しい登高ルートを開く山行が流行したともいえる。戦前に第三高等学校や京都帝大の探検的登山に名を挙げた身近な先人たちの伝統をつぎたいと考えていた京大山岳部もその波に乗ったといえるかも知れない。

Q：1960年８月17日アフガニスタンのノシャック（7492m）に岩坪五郎さんと共に初登頂しておられます。当時、麓に行くまでにどれほどの日数がかかったのですか？

神戸港出港の飯野海運若島丸に乗船、パキスタン国カラチに上陸、入国するまでに28日。移動と滞在を合わせて72日後にベースキャンプに入りました。

（想像以上に日数がかかっていますね）

そんなことより我々は未知の山ノシャックはそもそも登れるのか、麓にまで近づけるのか、どんな姿かたちをしているのか、情報がほとんど無いといって良いまったく未見、未知の山でした。イギリス植民地下のインドで測量活動をになったIndian Surveyはインド亜大陸で大三角点測量と称した困難な事業を担当したのですが、中国南西部、チベット、中央アジアの各地

と境界を接する北の高原と山岳地域では外交と安全確保のためにも秘密裡に測量と製図をおこなう必要があって、どこでも作業は難航しました。限定的な条件下で少部数しか印刷刊行されなかった辺境山岳地域の地図を日本で入手するのは困難なことは当然自明のことです。
（まさに冒険ですね、この遠征のお話しはまだまだ聞きたいところですが、また、別の機会にお願いいたします。）

最後に伝えたいこと、支部への希望がありましたら、お聞かせください。

登山はスポーツの種類に数えられますが、多くの他のスポーツと比べると、幅が広く、奥行きが深いという顕著な特性を持つことに気づきます。谷歩き、やぶ漕ぎ、岩登り、スキーなどなど、個々の山岳の個性に適合した種々の技術を求められるし、入山したその時の気象条件も千差万別といえるほど多様性に富んでいます。登山がもつ総合性を愛する立場は認めらるべしと思いますが、一方において人工壁などの無機的空間において競争者と寸秒の時間やわずかの高度の差を競い合う競技があっても良い。そうした寛容な態度を持つことが大事なのだと思います。ただ私の好みをあえて言うならば、登山において自分が相手とするものは競合する他者の存在ではない。地上の未知の空白の領域を狭め、人類の既知の世界に取り込みたいと考え、自分を包み込んでいる自然物“山”であると考える立場です。
（貴重なお話をありがとうございました。）

令和5年度年次晩餐会

笠谷　茂

令和５年度年次晩餐会が12月２日（土）、東京新宿の京王プラザホテルにて開催され、午前中に行われた支部連絡会に出席後、講演会及び晩餐会に出席した。

晩餐会の出席者は、全体で約340名、京都・滋賀支部からは笠谷と小田佳子会員の２名が参加した。

記念講演会（13時～16時30分）は下記３テーマの講演が行われた。

1. ティリチミール北壁初登攀
2. グレート・ヒマラヤ・トラバース報告会
3. 秩父宮記念山岳賞受賞記念講演

「北アルプスの形成に関する地質学的研究および山岳関係者への教育普及活動」で、秩父宮記念山岳賞を授賞した原山信州大学名誉教授の記念講演。

個々の内容に関しては、『山』12月号（No.943）に譲ることにする。

最初の講演の主題であるティリチミール（7708m）は、私たちは京都・滋賀支部とも大変ゆかりがある山で、1991年に支部５周年記念事業でパキスタンのアドベンチャー・ファンデーションと合同登山を行い、見事登頂を果たしている。この時のメンバーは斎藤淳生総隊長、ジャン・ナディール・カーン副総隊長以下17名で、登山活動に参加したのは日本側７名、パキスタン側６名。登頂者は、当支部の須藤建志さん（故人）と宮川清明さんである。そして登山隊に紅一点参加したのが小田会員で、今回ティリチミールの講演があるということで晩餐会に出席されたとのこと。

晩餐会は、橋本会長による開会の辞、物故会員への黙とうに続き永年会員顕彰があり、今井通子永年会員より挨拶があった。その後の新入会員紹介では代表挨拶を萩原佑紀会員（13歳：中学１年生）が行い、会場が湧いた。次に秩父宮記念山岳賞表彰・受賞者挨拶で、原山智信州大学名誉教授が登壇し、後継者不足を懸念。フィールドでの基礎研究を行う研究者が出にくい現在の研究者の評価制度の改革を訴えておられたのが印象に残った。そのあと歴代会長と原山氏による鏡開き、古野前会長による乾杯と続き、宴が始まった。

京都・滋賀支部２名は、群馬支部の方と同じテーブルで、９月の支部懇談会時にお会した根井支部長、小池事務長などが同席であった。

ティリチミール関係で小田会員からも当時の話を伺うことができた他、今回講演を行ってくれた平出和也さん、支部として登頂を果たした石川支部の樽矢支部長などとも一緒にお話をする機会があった。改めて日本山岳会とは人の縁をつなぐ会であると実感した。

散会後、支部ごとに壇上で記念撮影を行うことができる中、京都・滋賀支部は２名に加え松田理事（同志社大学出身）が一緒に壇上に上がってくれた。

次年度、より多くの参加者が集うことを期待している。

京都・滋賀支部参加者記念撮影（松田理事、笠谷、小田会員）

支部新年会（2024年）

藍野裕之

今年も毎年恒例の「日本山岳会 京都・滋賀支部 新年会」が1月17日に開催された。

駒井治雄委員の司会のもと、まず今年1月1日に能登半島を襲った大地震で亡くなった方々へ向けて1分間の黙祷が捧げられた。私が暮らす京都市東北部も大きく長い揺れを感じた。その後に続々とニュース報道が流れ、被害状況が日ごとに明らかになり、正月気分に浮かれている場合ではないことに気が付き始めた。もとより被害の大きかった石川県と京都府は遠くない。石川県にも日本山岳会の支部があり、京都・滋賀支部との交流も多かった歴史がある。それを知るベテラン役員は、すぐに連絡をして安否確認したそうだ。幸い命の無事は確認できたということだが、ひどい被災をされたという。地理的に近く、同じ山仲間として少しでも助け合うことができないか。当支部の会員の方々も、そんな気持ちになったのではないと思う。

ちなみに、専門科学者に確認したところ、気候変動と地震多発は密接に関係しているそうだ。温暖化によって極地の氷、各地の氷河が融ける。それがめぐりめぐって海水量、つまり海水重量を増やし、海底地下の流動体であるマントルにかかる圧力を増加させるという現象を誘発する。圧力がかかって海底地下に居場所を失ったマントルは、分散を始めて火山の多い地域で地上に出ようとする。日本列島、その近隣海域には火山が多いのは周知のことだろう。そこにマントルが吹き出ようとすることで地震が起こるという仕組みだそうだ。

登山は自然が遊び場である。今後の登山のあり方を考えるうえで地球の危機の解決に向けた方向を模索しつつ楽しむ、という方策を考える必要があるだろう。私は、そんなことを思ってしまった。

その後、笠谷茂支部長の挨拶があり、続いて田中昌二郎顧問の発声で乾杯となった。そして、参加者は思い思いに歓談した。普段なかなか会うことができない会員同士の交流はいい。思わぬ会話の中から次の山行のアイディアが生まれ、実行へ向かうことがあるからだ。サロンの強みはそこにある。惜しむらくは参加者の高齢化が目立つところだ。若い会員の方々にとっては、遠慮もあったり時間もなかったりで参加は厳しいのだと思うが、なんとか参加していただけないかと思う。

ここで少し、ここ数年新年会が開かれる場所について記させていただく。「南禅寺 順正」。ここは大伽藍で知られる南禅寺門前で湯豆腐を専門にする料亭である。江戸時代後期の京都に新宮凉庭という蘭方医がいた。この凉庭は当時の最先端医学である蘭方、オランダ医学を後進に伝えるべく、私財をなげうって開いたのが「順正書院」だった。幕末に来日して日本の山々を調査したオランダの博物学者フランツ・フォン・シーボルトもここに滞在した。店名は、この歴史に由来する。同店の歴史ある建物、庭園の一角には今も「順正書院」の建物が残っている。料亭となって今は経営を後進に譲っているが上田闊三郎さんは、我が支部の役員のひとりである。そんな縁で支部新年会が行われ続けているのだ。あまり知られることない歴史に触れる意味でも、多くの若い会員の方々に参加していただきたいと思います。何卒、よろしくお願いいたします。

実施日：2024年1月17日（水）
参加者：33名

新年会が厳かに開かれた。

登録文化財である「順正書院」の建物

山水会　報告

八木　透

久しぶりの山水会が開催された。講師は佛教大学教授で考古学者の堀大介氏で、テーマは「泰澄和尚と古代白山信仰」。堀氏は泰澄と白山信仰研究の第一人者で

ある。かつて、学会では泰澄が架空の人物として理解される傾向が強かったのだが、堀氏は泰澄の伝承を残すほぼすべての山や寺院、遺跡等を実際に踏破し、発掘された土器などの出土物の分析から、泰澄が実在の僧であったことを実証した研究者として知られている。

120 分に及ぶ熱の籠った講演では、「白山の遥拝と白山信仰の広がり」「近畿圏における泰澄伝承の広がり」「泰澄和尚と『泰澄和尚伝記』」「白山禅定道と越前馬場の成立」「越智山・白山を一体とする宗教空間の形成」という、全 5 章におよぶたいへん奥の深い内容を、必ずしも専門的になりすぎず、一般人にも理解できるような平易な語り口でお話していただいた。参加はおよそ 40 名ほどであったが、誰一人舟を漕ぐ者もおらず、終止、堀氏の語りに聞き入っていたと思う。それほど豊かな、誰もの興味をそそる内容であった。発掘という方法を駆使し、出土する遺物から歴史を紡いでゆく考古学という学問の醍醐味が真に伝わる講演であった。さらに白山を中心とした山域の多くの山名が、レジュメの地図上に記載され、実際に堀氏が歩いた道や登った山々が登場したことから、この山域をくまなく歩かれた山岳会のベテラン会員の方々も、地図を睨みながら目を輝かせて講演に聞き入っていた。

講演会終了後は、同会場にて懇親会が開催され、約 25 名が参加した。懇親会でも白山登山や周辺の登山道等の話に花が咲き、堀氏を囲んで和やかな雰囲気で幕を閉じることができた。このような刺激的な講演会としての山水会は、やはり少なくとも半年に一度は開催したいものだと改めて思った次第である。

日時：2024 年 1 月 20 日（土）13 時 30 分より
会場：京都市職員会館「かもがわ」

考古学者堀大介氏「泰澄と古代白山信仰」を語る。

熱心に拝聴されている皆さま。

堀先生を囲んで山水会親睦会も終盤に。

京都・滋賀支部担当古道の調査完了の報告

支部古道担当：村上　正

足掛け 4 年にわたって調査をしてきました、日本山岳会 120 周年記念行事企画のひとつ「全国山岳古道調査･日本の山岳古道 120 選」の取り組みにおいて、京都･滋賀支部が担当した 9 古道の調査と報告書が完成しました。これをもって京都・滋賀支部の古道委員会は解散します。

この間、支部会員や調査に関わって頂いた皆様方に感謝いたします。尚、完成した原稿は支部会員と調査に協力頂いた方々に限定して、メール便にてお届けします。限定としたのは、集まった 120 の古道を全国古道委員会が120選として纏めるまで時間がかかります、それらが完成するまでは京都・滋賀支部調査の報告としていますので他者に転送することはしないで下さい。

この他に、全国古道委員会が取り組んでいるイベント熊野古道集中山行「みんなで歩く熊野古道」が 2024 年 5 月 12 日（日）～ 19 日（日）に開催されます。

支部からのお知らせがあると思いますので、それを参照してください。

（フクジュソウ）

図　書　紹　介

山の怪と民俗研究会編
『山の怪異譚』
2017年　河出書房新社　1200円

八木　透

本号から山をめぐる少し怖い書籍を紹介することにしたい。日本の山は人の手がまったく及んでいないようなエリアは皆無に等しい。何らかの形で人間の匂いが染み付いている。しかしそれでも、山は人々に言い知れぬ不気味さと畏怖の念を呼び起こす空間であろう。山をめぐる怪談話は、古くから現代まで枚挙に暇がない。登山を経験した者は、少なからず不思議な体験をしたことがあるだろう。中には身も凍るような恐怖体験を味わった人もいるかもしれない。今回紹介するのは、必ずしも背筋が寒くなるようなホラーチックな怪談話ではなく、19世紀から近年に至る、日本の山をめぐるちょっと不可思議な話を収録した、「山の怪談の名作集」とでも名付けたい書籍である。

著者は総勢25名。25話の怪異譚が収録されている。著者の中でもっとも古いのは、何といっても鈴木牧之だ。彼は18世紀から19世紀に活躍した江戸期の随筆家で、雪深い越後の生活や風俗、奇譚などを収めた『北越雪譜』はよく知られた作品である。他にも、芥川龍之介・岡本綺堂・小泉八雲・幸田露伴などの文豪から、新田次郎・辻まこと・片山英一などの登山家および山の随筆家、また柳田国男・佐々木喜善・岩科小一郎らの民俗学者など、まさに堂々たる執筆陣である。これら各界の著名な文筆家の文章をまとめて読めることが本書の最大の醍醐味だといえるだろう。中でも、私は鈴木牧之の「雪中の幽霊」と片山英一の「怪談『八ヶ岳』」を推したい。前者は鈴木の代表作である『北越雪譜』に収録された作品で、越後の魚野川にかかる橋の袂に庵を結ぶ源教という念仏僧が、雪の降る夜に現れた女の幽霊の黒髪を剃って成仏させるという話だ。卓越した文語調で綴られた幽霊話は、怖いというより、世の無常と念仏の徳を伝える情緒あふれる作品に仕上がっている。また後者は、戦前の神戸山岳会による正月合宿が八ヶ岳で行われた際の不思議な出来事を綴った短編である。厳冬期の赤岳鉱泉に現れた女性の幽霊や、赤岳の石室での遭難者の出現など、少しゾクッと来るが、雪山での不思議な体験を軽快なタッチで描いた名作である。

これ以上の内容を紹介することは、あえて控えよう。山好きの輩の多くは怪談好きでもあろうと思う。そんな方々はぜひ本書を手に取って、夜の寝床でページを捲りながら、不思議の世界に浸っていただきたいものである。

『山の怪異譚』

支部の図書室がほしい

藍野裕之

わたしは東京暮らしが長かったので、麹町にある日本山岳会図書室をよく利用した。東京時代は会員ではなかったのだが、会員の紹介があれば図書室は使えた。山岳小説など読みやすい書物も丹念に集めているのだが、出版業界で仕事をしてきたので、ありがたかったのは古い遠征の記録であった。国立国会図書館にすらないものがそろっているのだ。蔵書の数は約15,000点になるという。

京都に移って日本山岳会に入会したが、残念ながら京都・滋賀支部には図書室がない。しかたなく京都大学図書館を利用する。しかし、卒業生ではないので館内閲覧はできるが館外貸出はできない。そんな矢先、昨年末に送られてきた会員誌『山岳』119号に「山岳書が危ない」「散逸の危機」と訴える記事が載っていた。全国各地で蔵書家が亡くなるなどして、山岳書の散逸は進んでいるという。運よく散逸を免れた稀有な例も紹介されていた。我が支部に関係するところとしては現在のイセトーの代表取締役だった小谷隆一さん（1924

～2006）の蔵書だ。桁はずれのコレクションは信州大学に寄贈され、しっかり管理、利用されているそうだ。

今年ももうすぐシャクナゲの季節がくる。唐突で恐縮だが、この花のことを思うと、わたしの「支部図書館」の願望は強くなる。シャクナゲを西洋社会に広く知らしめたのは『シッキム・ヒマラヤのシャクナゲ』（1849～51）という書物だ。30葉の手彩色図版を載せたこの大著の著者はイギリスの大探検家J.Dフーカー（1814～1911）。彼はその後1854年に東部ヒマラヤの探検記も著した。それを翻訳して『ヒマラヤ紀行』（白水社）として刊行したのが我が支部の顧問のひとり薬師義美さんなのである。

わたしは薬師さんにお会いしたことはないが、その蔵書がたいへんなものであるのは伝え聞いている。とりわけヒマラヤ関係のコレクションは日本の登山界随一だろう。それが散逸となれば一大事だし、我が支部の中でそれが起こるとなれば、わたしたちは、それをどう思えばよいのか。とはいえ、図書室創設は大きな事業だ。散り落ちるシャクナゲに何の手も差し伸べられないのと同じような無力感が込み上げる。

2月初旬、上賀茂にある総合地球環境学研究所の前所長、安成哲三さんと仕事で神奈川の鎌倉まで旅をした。気象･気候を専門にする科学者で、登山家でもある。今は京都気候変動適応センターのセンター長とともに、（一財）全国「山の日」協議会の科学委員長も務めている。鎌倉まで道中、安成さんはこんな話をしてくれた。

「薬師さんの翻訳された『ヒマラヤ紀行』によれば、フーカーはヒマラヤ山麓の標高4000mあたりで気象観測をしているんです。その中に『雪が降った』とあるのですが、わたしも大学院生のときに半年ぐらいヒマラヤの同じような標高のところで調査しましたが雪など降りませんでした」

明らかに気候変動の証拠である。さらに安成さんは、フーカーが園長を務めたロンドンの王立キュー植物園に問い合わせたという。すると先方はフーカーのヒマラヤ調査の資料が保存されていると返答してくれ、急いで準備してロンドンに向かったそうだ。そして、念願のフィールドノートほかの資料を丹念に複写していくと、なんとC.ダーウインがフーカーに宛てた手紙まで出てきたという。書物や記録は200年近い年月とイギリスと日本という国境さえも越え、好奇心と好奇心を結びつけるのだ。その間に薬師さんの翻訳書がある……。

一冊の山岳書が人生を変える。そんな大きな話ではなくても、本がきっかけで新しい山行のアイディアを得たりもする。何より図書室があれば会員同士で本から得たことを話し合うサロン文化を培える。前出の『山岳』の記事を書いた神長幹雄さんは元山と溪谷社の編集者で日本山岳会の図書委員である。わたしはかつてお世話になった。そこで、ご無沙汰してしまった無礼を詫びつつ電話で事情を聞いてみた。すると、「日本山岳会だけではなく、さまざま山の会に呼びかけて同じ思いを持つ同士の連絡会を作る計画だ」と返ってきた。わたしは、「連絡会ができた際には、京都・滋賀支部もメンバーに加えてください」と頼み、その経緯を支部役員会に報告した。

まだどうなるかわかりません。でも、みなさん、何かよい方法はないでしょうか。知恵を寄せ集めて何らかの手を打つことはできないでしょうか。山岳書の散逸阻止、図書室創設に関して小さなきっかけでも知っておられたり耳にされたりしたら、ぜひ笠谷支部長ほか役員の誰でもいいので、お話を伝えてください。何卒、よろしくお願いします。

『シッキム・ヒマラヤのシャクナゲ』より

薬師義美さん翻訳の『ヒマラヤ紀行』

日本山岳会京都・滋賀支部の皆さまへ【山書会より】

図書担当　竹下節子

「山の本を読み紹介する」の山書会です。

会員の皆さまへ図書の貸し出しと、おすすめの図書を「支部だより」に掲載をしています。会員の皆さまと、山の本を通して「山を愉しむ」（笠谷支部長）を目指しております。

山を歩きながら、山ごはんのときに、テントの灯りの下で、グループ LINE を利用して、会員掲示版などでと、山書会に参加する選択肢がたくさんあります。蔵書をきっかけに教えてもらった山の本、「支部だより」に紹介された山の本が何冊になったでしょう。

皆さまも参加してみませんか。今年もどんな図書に出会えるか愉しみです。

それから図書担当が１名、増えました　昨年より図書担当は２名で運営しています。

（藤綱珠代と竹下節子）です。何なりとお申しつけください。山の本と皆さまをつなげます。

【報告】　☜ ここから入れます。どうぞ覗いてみてください。

◎新しく 46 冊が HP 蔵書欄に追加掲載されました。

新入会員自己紹介

◎松田雄二（No.17176）

はじめまして、松田雄二と申します。現在 63 歳となり 40 年間勤めた第一の仕事も定年退職を迎え、時間的にもある程度余裕が出来たことから、今回山岳会に入会させて頂きました。

私は、比良山系の麓に 20 数年間暮らしており、10 数年前から散歩の延長で山に登り始めました。唯、まったくの自己流で山に登っていたことから、年を重ねるごとに一人での山登りを続けることに対して、大変不安がつのるようになりました。

また、一時、鈴鹿山系の山々を登ったことはあるのですが、基本、比良山系の武奈ヶ岳や蓬莱山ばかり登っていたので少々飽きがきたというのが正直なところです。

今後も安全な登山を続けるために今回山岳会に入会し、今まで行ったことのない山に登りたいと思います。皆様の足手まといにならないようにしたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。

会員の矢野正明さんの山道具絵
「キスリング」
「ピッケル新旧」

行事案内

◇山行への参加申込は、例会名、会員番号、氏名、年齢、電話番号等、緊急連絡先および山岳保険の加入・種類など必要事項を記入の上、メール、または FAX、郵送で。
◇「★マイカー分乗」の山行は参加者の自家用車利用を予定しています。ご協力をお願いします。
◇思わぬところで遭難事故が発生します。車両保険と同様、また、ご家族のためにも山岳保険の加入は登山者の常識です。会員各位のご理解をお願いいたします。

日本山岳会京都・滋賀支部 2024 年度（令和 6 年度）第 39 回総会の案内

実 施 日：2024 年 4 月 6 日（土）
場　　所：鴨沂会館　新館ホール（203 号と 204 号）
京都市上京区荒神口寺町東入ル荒神町
電話：075-231-1001
（市バス 3，4，17，205 系統「荒神口」下車西へ徒歩 1 分。京阪「丸太町」下車西へ徒歩約 10 分。）

①日本山岳会京都・滋賀支部第 39 回総会（午後 1 時 30 分～午後 2 時 30 分）
2023 年度事業報告、決算報告。2024 年度事業計画（案）、予算（案）。
2024 年度支部役員（案）。「今西錦司賞」選考経過。その他。
（今回は会場が短時間しか使用できず、総会のみの開催となります。）

※総会出欠ハガキの投函（63 円切手添付）およびメール等の速やかな連絡にご協力下さい。よろしくご協力をお願い申し上げます。

（問い合わせ等）
日本山岳会京都・滋賀支部　事務局
〒 639-1054　奈良県大和郡山市新町 534-5
電話：0743-54-6685　携帯電話：070-2315-6685
E-mail: iharajac@gmail.com, iharajac@hkg.odn.ne.jp

北山探訪

「原点の山に新しい愉しみを求めて」、地元の山を巡り、その魅力を一緒に感じましょう。

◎地蔵杉△ 898.9m（Ⅲ地蔵杉）

長老ヶ岳から頭巾山への稜線上の秀峰
実 施 日：2024 年 4 月 20 日（土）
集合場所・時間：参加者に連絡
行　　程：南丹市美山町鶴ケ岡⇒豊郷⇒洞⇒洞谷川林道駐車→洞峠→・723 →・775 →地蔵杉頂上（三等三角点　点名地蔵杉）→・793 →・742 →神谷（カンダン）・298 →豊郷
地 形 図：1/25000 図「島」「口阪本」「和知」「丹波大町」
山行の目安：体力 3、技術 3　〔注〕少々藪漕ぎあるかも
担当者・リーダー：田中昌二郎
FAX：075-231-0241
メール：tanaka-shoujiro@jac-kyoto.jp
申　　込：4 月 10 日（水）迄に所定事項記入のうえ、FAX またはメールにて

◎ハナノ木段山△ 703.9m（Ⅲ佐々里）

新緑のマイナーピーク探訪
実 施 日：2024 年 5 月 11 日（土）
集合場所・時間：参加者に連絡
行　　程：佐々里集落より尾根に取り付き山頂へ。往路を下山
地 形 図：1/25000 図「中」
山行の目安：体力 2、技術 3　〔注〕少々藪漕ぎあるかも
担当者・リーダー：八木　透
メール：yagi-to@bukkyo-u.ac.jp
申　　込：4 月 29 日（月）までに所定事項記入のメールで担当者まで

◎地蔵谷峰△ 791.6m（Ⅲ地蔵谷）

朽木のへそ、近江百山でもあるマイナーピーク探訪
実 施 日：2024 年 6 月 15 日（土）
集合場所・時間：参加者に連絡
行　　程：坊村駐車場⇒朽木能家→南尾根→地蔵谷峰→・738 →朽木能家⇒坊村駐車場
地 形 図：1/25000 図「古屋」
山行の目安：体力 3、技術 3　〔注〕少々藪漕ぎあるかも
担当者・リーダー：笠谷　茂
メール：kasatani@mri.biglobe.ne.jp
申　　込：6 月 3 日（月）までに所定事項記入のメールで担当者まで

テント泊山行

金剛堂山 1650m

目的の山域・山名：富山県南砺市と富山市八尾町の境界に位置する修験道の名山である。前・中・奥金剛の3峰を有し、前金剛に一等三角点と祠がある。最高点は中金剛1650m。草原状の稜線からは、御岳・乗鞍・槍・穂高などの眺望を楽しむことができる。

実 施 日：2024年6月8日（土）～9日（日）
集合場所・時間：参加者に連絡
行　　程：8日（土）北陸自動車道⇒砺波IC⇒R156⇒R472⇒道の駅利賀⇒R229⇒栃谷登山口　テント設営・泊
9日（日）栃谷登山口→△997.9m→・1021→・1346→・1451→前金剛山1637.9m→中金剛堂山1650m→往路下山
地 形 図：1/25000図「白木峰」
山行の目安：実働、登り3時間程度、標高差約900m、体力3、技術3
担当者・リーダー：田中昌二郎
FAX：075-231-0241
メール：tanaka-shoujiro@jac-kyoto.jp
申　　込：5月22日（水）までに支部所定事項記入し、FAXまたはメールで担当者まで

山岳展望と秘湯の旅

霊峰富士山展望・甲斐の秘湯　不動湯

富士山周遊し、数時間で登山もします。温泉は、オリンピック選手もリハビリに来たなだたる霊水です。鉄砲木の頭山（1291m）から富士山と山中湖を一望します。時間があれば、他の温泉も楽しみます。

実 施 日：2024年5月10日（金）～11日（土）
集合場所・時間：近鉄京都線大久保駅西側（自衛隊大久保側）急行停車
午前8時
交　　通：車走行
参加費用概算：約25000円（ガソリン代、高速道路利用費、宿泊代等）
山行の目安：体力1、技術1　歩行時間約2時間30分
担 当 者：幣内規男
〒610-0121　城陽市寺田今堀20-6
電話：0774-53-1385
メール：hechan0165@eco.ocn.ne.jp
申込、問い合わせ：4月20日（土）までに所定事項記入の上、メールで担当者まで。

シャクナゲ山行 2024

実 施 日：2024年4月28日（日）雨天中止
目 的 地：比良八雲ケ原周辺（昼食場所）
集　　合：イン谷口バス停前8:00
内　　容：馬の背尾根周辺のシャクナゲ
行　　程：ダケ道往復、17:00下山予定
山行目安：体力2、技術2
担 当 者：松下征文
メール：04etmm@gmail.com
申　　込：メールで4月20日（土）迄に

今西錦司レリーフの集い

北山直谷にある今西錦司レリーフを訪ね、清掃・補修作業を行います。

実 施 日：2024年5月12日（日）
集　　合：植物園北門前　9時
行　　程：植物園北門⇒中津川出合橋⇒滝谷峠分岐→今西錦司レリーフ→滝谷峠分岐⇒中津川出合橋⇒植物園北門
地 形 図：1/25000図「周山」、「大原」
担 当 者：駒井治雄
電話：090-2594-1403
メール：torino51@kce.biglobe.ne.jp
申　　込：5月5日（日）までにTELまたはメールで担当者まで

春のスケッチ

青葉の嵐山から愛宕山を臨む

実 施 日：2024年5月20日（月）
集　　合：阪急電鉄嵐山駅前広場
午前9時30分
春の観光シーズン注意してください。
前日19時前のNHK天気予報で降水確率が午前50％以上時は中止します。
担　　当：山田和男
〒603-8341　京都市北区小松原北町55-6
FAX：075-461-2367
メール：8341ymd@iris.eonet.ne.jp
申　　込：5月13日（月）所定事項記入の葉書、FAXまたはメールで担当者まで。翌週は担当者が旅行の為不在となります。

会務報告　支部役員会

第 454 回支部役員会

2023 年 11 月 1 日（水）　18:30 ～ 20:45
（於）鴨沂会館
出席：15 名　欠席：4 名

「開催挨拶」

次年度に向けた山行部会の内容共有と、晩餐会への参加申込変更対応、友の会の今後の対応を整合したい。

「報　　告」

10 月に実施された文学の山々、ダンダ坊整備、写真サークル、北山探訪（向山）について報告
支部長・事務局長報告
インフルエンザ流行への対応、年次晩餐会への申込み方法変更への対応等
総務部会
会員動向について報告
山行部会
部会（10 月 25 日開催）の内容及び今後の進め方整合
遭難対策部会、古道調査、出版関係
連絡事項など報告

「計　　画」

11 月、12 月第 1 週に実施予定の山行計画について協議、承認
山水会及び全国、他支部関係行事への対応確認

「そ の 他」

友の会制度は 2024 年度にて廃止とすることを決定

第 455 回支部役員会

2023年12月6日（水）　18:30～19:00（引続き忘年会実施）
（於）カフェ・マノワール（西院）
出席：12 名　欠席：7 名

「開催挨拶」

会場の段取り、参集お礼。

「報　　告」

11 月に実施された 5 支部合同懇親山行、健幸登山教室（御在所岳）、北山探訪（シンコボ）、未知の山旅（青ヶ島、八丈島、八丈小島）、写真サークルについて報告
支部長・事務局長報告
冬シーズンへの備え、支部連絡会議（12 月 2 日）内容伝達など
総務部会
会員動向について報告
会費滞納者への督促について
山行部会、遭難対策部会、古道調査、出版関係
連絡事項など報告
年次晩餐会報告

「計　　画」

12 月に実施予定の山行計画について協議、承認
新年会、山水会への対応確認

「そ の 他」

支部連絡会（12 月 2 日）からの対応依頼事項共有

第 456 回支部役員会

2024 年 1 月 10 日（水）　18:30 ～ 20:30
（於）鴨沂会館
出席：11 名　欠席：8 名

「開催挨拶」

新年あいさつ、次年度に向けて意見交換したい。

「報　　告」

12 月に実施された健幸登山教室（リトル比良）、武奈ヶ岳の日、北山探訪（稲荷山）について報告
支部長・事務局長報告
体調管理、暖冬豪雪対応、本部理事会議事コメントなど
総務部会
会員動向について報告
古道調査
本部への報告提出完了、古道調査プロジェクトとしては今年度で終了
山行部会
年間計画の枠組みを確認

「計　　画」

1 月に実施予定の山行計画について協議、承認
全国、他支部関係行事への対応確認

「そ の 他」

熊野古道集中山行への対応協議
支部 40 周年への考え方整合
次年度の体制について

（笠谷　茂記）

日本山岳会京都・滋賀支部会報「支部だより154号」

発行所　〒520-2101 大津市青山4-1-5
笠谷　茂方
日本山岳会京都・滋賀支部
発行者　笠　谷　　茂
編集者　竹　下　節　子
印　刷　〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
（株）土倉事務所
TEL 075-451-4844　FAX 075-441-0436

心のふるさとの山 山の部屋

2024 年 5 月 21 日（火）～ 5 月 26 日（日）
京都市中京区寺町通三条上る西側
ギャリエヤマシタ 2 号館 1 階
開館 11:00 から 18:00（最終日は 17:00 まで）

『田中佳洋　山と花の作品展』

剱沢より剱岳

槍から大キレット

剱岳八つ峰

これらペン画を 10 点、その他に彩色の日本画も出品します。

田中佳洋（会員 No 16843）

会　員　異　動

会友入会：

藤澤　哲郎（岐阜支部所属）
会員 No.16992　2024.1
〒 502-0882　岐阜県岐阜市正木中 4-8-8-502
電話 058-231-3227

会員退会：

林　　正樹　会員 No.12262　2023.12
大和田　篤　会員 No.16819　2024. 1
宇都宮道人　会員 No.16106　2024. 2

友の会住所変更：

田淵　元子　（友 75）　2023.12
（旧）兵庫県明石市　⇒
（新）〒 793-0030 愛媛県西条市大町 813-1
サーパス大町 806 号

友の会退会：

石田　里美　（友 81）　2023.12
野崎　貴子　（友 60）　2023.12

― あとがき ―

このたび中川寛大先輩のご勇退を受け新しく編集担当を務めさせていただくことになりました。竹下節子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。中川大先輩におかれましては大変お疲れさまでした。感謝いたします。

今回、支部だよりの裏側を覗いてみていささか腰が引けています。理想の『支部だより』の編集と自分の力量の狭間に悩むことになりました。

先輩方や京都・滋賀支部の皆さまのお力を借りつつ、今は出来ないこと、知らないことを減らそうともがいております。皆さま方がご寄稿された原稿を丁寧にお届けものにすることを目標にすすんでいこうと思います。『支部だより』のネーミングは皆さま方から他の会員の方々への便り、手紙ということを意味するのだと思います。それをどのようにしてきれいにまとめていくか、これからも考えていきます。　（竹下節子）

次号 155 号　予告

2024 年 6 月 15 日発行　原稿締切 4 月 30 日（火）
原稿送付先　編集担当　幣内規男

関西発日帰り

海をながめる山歩き

草川啓三著 ◎絶景を楽しむ

若狭湾、熊野灘、瀬戸内海、紀伊水道…関西から日帰りで登れる海を見晴らす絶景スポット30コース！ 海をながめに山へでかけませんか。 1760円

森の巨人たち

草川啓三著 ◎巨樹と出会う—近畿とその周辺の山

山歩きで出会ったスギ、ブナ、トチ、カツラなど、様々な巨樹の圧倒されるようなフォルム、個性、生命力。出会いの悦びと魅力を語る。 1980円

極上の山歩き

草川啓三著 ◎関西からの山12ヶ月

春夏秋冬ひとの心をとらえる珠玉の山の中から、達人がすすめるランキング上位の30山を新スタイルでガイドする。 1650円

伊吹山案内

草川啓三著 ◎登山と山麓ウォーキング

百名山にも選ばれた花いっぱいの名山・伊吹山。ドライブウェイからは見られない、伊吹山の魅力の全てが見えてくるガイドブック。 2090円

山登りはこんなにも面白い

窪田晋二・檀上俊雄・草川啓三・中西さとこ・横田和雄著

◎静かなる私の名山を求めて

自分の意思をもって山に向かっている5人の登山者。それぞれが考える山登りの素晴らしさ、楽しさ、面白さを語る静山紀行。 1980円

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町 15 https://www.nakanishiya.co.jp/

電話 075-723-0111 FAX 075-723-0095

表示は税込価格です

IWAI CYCLE

【木津屋橋本店】
〒600-8248
京都市下京区大宮通木津屋橋下ル
営業時間：10：00 ～ 19：00
休　　日：無休(年末年始および夏期)

1F/一般車コーナー 075-341-7702

2F/スポーツ車コーナー 075-341-7703

【久世店（オーダーフレーム工場）】
〒601-8205
京都市南区久世殿城町 162
営業時間 :10：30 ～ 18：00
休　　日 : 毎週水曜日・木曜日

TEL：075-921-8679

The Japanese Alpine Club
日本山岳会
会員証
公益社団法人　日本山岳会
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4
TEL: 03-3261-4433　https://www.jac1.or.jp/

●旧会員証でも構いません●

日本山岳会 会員証のご提示で
店頭価格から御値引いたします！

※特価品・SALE 品は対象外です。
詳しくはスタッフまで！

取扱いブランド
gan well　CYCLE PRO　inelli　vittoria　HED.　DOLAN　PINARELLO
LOOK　ANCHOR　SCOTT　FOCUS　Wilier　corratec　など